

シリーズ

発達に違いのある子どもたち 「心の理論」

今回は、5月号でも取り上げた「心の理論」の発達について、もう少しご説明したいと思います。

「心の理論」は他者の心を推し量り、行動を予測したり解釈したりする能力とお伝えしましたが、その発達に違いがあると、実際にはどのようなことが起こるのか、例を挙げてみたいと思います。

Aちゃん行方不明事件

自閉症スペクトラム障害（ASD）を持つ5年生の女の子のAちゃんは、毎週水曜日の夕方、お母さんの送迎で英会話教室に通っていました。お母さんは朝からAちゃんに、「今日は英会話に行く日だから、5時には玄関の前に出ててね。」と言って学校に送り出しました。

夕方お母さんが、Aちゃんを英会話に連れて行くこうと思い、仕事先から家に帰りましたが玄関の前には誰もおらず、家には鍵がかかっていました。ど

こに行っただろうと周囲を探すけれどAちゃんは見当たらない。よく行く近所の下級生の子の家に電話してみたら、「今日はAちゃん、遊びにきましたけど、もう帰りましたよ。」と言われ、不安になり、心当たりのある家に数件電話をしました。遊びに行つてはいないようでした。もしや学校にいないかと学校に電話をかけたら担任の先生がおられ、やはり学校にもAちゃんはおらず、先生も心配してあちこち電話をかけて探してくれました。それでも見つからないので、「もう警察に相談しましょう。」という話になりました。その前にもう一度近所を探してみますと先生に伝え、少し待っていただき、自宅の隣の区画まで見に行きました。隣の区画には、先ほどの下級生の子の家があり、その家に近づくど誰かが立っています。Aちゃんでした。彼女は家の玄関の前に、ちゃんと英会話のテキストのに入った手提げ袋を持って立っていました。お母さんは怒るにも怒れませんでした。確かに言った通り「玄関の前」にいるのですから。

え〜っ！知らんか〜？

ASDのお子さんの療育では、その子の周囲で起こったことの状態理解を促したり、その時の感情を確かめ、コントロールする力を身につけるために、お子さんの近況を聞いて視覚的に整理していく手法があります。ある日3年生のB君は、自分の学校の友達のことを話してくれました。B君「昨日ね、〇〇君と遊んだんだよ。」支援者「〇〇君って誰？」B君「ほら、〇〇君たい！先生知らんと〜？」支援者「いや、会うたことないし知らないねえ〜」B君「なんで〜？〇組の〇〇君たい！ほら〜」B君は、支援者が〇〇君を知らないことがとても不思議そうでした。

他者の視点に立つことが苦手

ASDのお子さんは、しばしば「他者の視点に立つて考える」ということが苦手です。定型発達のお子さんでも、年中くらいまでは難しいことですが、ASDのお子さんの場合は、それが後々まで長引いてしまいます。Aちゃんが、もし、お母さんの視点で考えていたら、お母さんが職場から慌てて帰ってきて迎えに来る場所は「うちの玄関の前」

と理解したであろうし、B君が支援者の先生の視点で考えていたら、B君とは違う場所で生活をしている先生は、B君の学校の友達のことには知らないとして理解したでしょう。

暖かくなれば

世の中には、実に沢山の「暗黙の了解」や「本音と建前」があり、「言わなくてもわかる」ことを求められます。その中で発達に違いがある子ども達は、人の考えを推測することが難しく困惑してしまいます。しかし、決して「心の理論」の能力が発達しないわけではありません。周囲の大人が叱責や非難をせず暖かく見守り、どうして他者がそう考えるのかを一つ一つ丁寧に解説し、積み重ねていくことで理解を深めていくことができるのです。



参考文献 発達心理学研究 2013 第24

巻第4号 429-438 発達

障害における基礎研究と臨床への

適用：自閉症スペクトラム障

害と心の理論の視点から

藤野博（東京学芸大学教育学部教授）